2010年　秋学期レポート

富田　望

[履修コース]

LIN 771 Field Method
EDU 707 Structure & Application of American Sign Language & English
LIN 521 Introduction to Cognitive Linguistic
LIN 703 Proseminar 1
LIN 585 Linguistics of Non-Manual Sign Language

LIN 771 Field Method

このクラスの目標は、言語のフィールドワーク分野におけるデータ収集の経験を積み、データ収集に必要最低限のテクノロジー技術とそのデータの分析方法を習得し、言語学における Field Work に必要最低限のノウハウを習得するとある。

毎年、ギャロデット大学院言語学部は、この LIN 771 Field Method のために、English Language Institution（ELI）から、一人、二人の情報提供者を条件付き待遇で迎えることが恒例となっており、今年度も 4 人のサウジアラビアろうあ者が情報提供者として迎えられた。

このクラスを履修した生徒は全部で 7 人であり、ほとんどのメンバーが言語学科からである。このクラスを履修してからというものの、膨大なデータを取り込んだり、整理作業に追われたり、レポートを作成したりと、ほとんどの作業がチーム作業であった。チーム作業というのは、相互間に尊重する気持ちや、何かに対する情熱というものが無いと難しい。私たちのチームも、これは例外でなく、最初の期間はなにかと大変であった。一度、歯車が狂ってしまうと個々の意見の違いに留まらず、メソッド方法の違いや、信念など、言語学を勉強するにあたっての姿勢の在り方などに議論や批評がいって、あまりのまとまりの無さに、教授からドクターストップがかかる程のまとまりの無さであった。最終的には、“Respect” & “love” を合い言葉にチームとして纏まることができたものの、こういった経験は自分にとっても、初めてで、戸惑う事もたくさんあった。言語学の生徒でないのにも関わらず、暖かく迎えてくれたチームメンバーの皆には感謝の気持ちでイッパイだ。データ収集のノウハウなどは以前に履修クラスや、トレーニングなどを通して学んだから、学業面では特にこれと

いって問題はなかったが、やはり個人的に自分とは違う人、異なった考え方を持っている人と話し合い、どこからどこまで妥協し、妥協しないかというような議論をする時に必要な技術は、やはり理論で学べるものではないとつくづく感じたりもした。

幸い自分は国際学生で、留学生という立場であるからか、サウジアラビアの生徒達は自分にとても優しかった。手話だけでなく、自分の国の宗教や、文化などについても教えてくれたりするから、自分も頑張って学ぼうという気持ちになる。

最終試験期間には、この教科に関する試験などは無かったものの、サウジアラビア手話の辞書、今までに集めてきたデータの中から、気づいた点、特徴などをまとめたレポート、また個人レポート（リサーチクエスチョン）の三つを提出しなければならなかった。自分が選んだテーマは「サウジアラビア手話における Internal hand movements」であり、これまでのデータ収集からサウジアラビア手話にはアメリカ手話よりも Internal hand movements に関するデータが多く見つかっており、これが弁別素性をもった音韻単位になるのか、それとも形態素レベルでの分析になるのか、この答えは今後のデータ収集にかかっている。このリサーチは次のクラス(LIN 771 Field Method 2)でも、そのまま引き続き行われ、今回よりも小規模なグループに分かれてのリサーチになる。

EDU 707 Structure & Application of ASL & English

Bilingual×Bicultural の理念のもと、英語とアメリカ手話における基本的な言語学知識と構造を知り、指導案の作成、クラス内での理論と経験の応用を中心に学んでいくクラスである。ろう児に関わる教育者ならば、言語学、とくに手話言語学に対する基本的な知識は必須の必須であり、クラスで得た理論や内容をいかに自分の教科、様々なアプローチに応用していくかを考えていくのがこのクラスの最終的な目標となっている。

前半には手話言語学に関する知識、とくに音声学部門、形態音韻論、また統語論に関する基本的な知識に集中した。言語学分野で研究されてきた理論や、内容を学び、いかに英語とアメリカ手話が異なった性質、構造を持っているのかを、きちんとリサーチや、データなどの裏付けをもって説明できるように、クラスのプレゼンテーションや、クラスでのディベートに集中していた。後半からは実践論に入り、その言語学科で研究されてきた研究資料内容をいかに実

践的なアプローチ、レッスンプランに取り入れて、どういった長期的な教科科目プランを組み立てていくかを考えていくようにと言われていた。

その他にもグループプロジェクトの一環として、Kendal Demonstration Elementary School の生徒の言語力を分析するというのがあった。というのも、一般的には子どもの言語学がどれぐらいあるのかを視察する時に参考にされるのが書記英語の試験用紙であり、その点数がその児童の言語力に直接結びつけられる。しかし、KDES では手話分析による言語力の判定もその参考資料の一つとされる為、ギャローデット大学教育学部を卒業する学生は必ず皆、手話分析をある程度できるようにならなければならない。このプロジェクトは長期間で行われ、その時に一緒になったグループの人達とスケージュルの調整や、また共同作業をこなしていくのは大変だったけれど、それでもこのプロジェクトを通して学んだことは沢山あった。例えば、一つ、評価レポートを作成するにしても、メンバーが皆、そろって、あぁでもない、こうでもないと議論したりして、一つの分野にしても、判定内容が大きく異なったりして、難しかったのは記憶に残っている。最終的には様々な分野から、その児童の言語力のアレコレを分析した３０ページにわたる言語力分析表、またその結果レポートを作成することができ、おおいに安堵のため息をついたものである。

言語の力が書記言語の方に大きく反映されるのか、または手話言語の方に大きく反映されるのかを明らかにすることが、指導計画書の内容に大きく響くし、また今後の対応方法も変わってくる。日本の公立私立学校でこういった言語学視点からきちんとした教育アプローチ、指導計画書が作成されるようになるのはいつごろになるだろうかとふと思う。

私が学んだ内容がそのまま日本の学校教育機関で行われるべきだとは言わないが、それでも文化的視点からろう者、聾コミュニティをみたときに、手話言語がいかにろう者、ろうコミュニティの中でいかに大きな役割を果たしている事がわかる。アメリカにはアメリカなりの方法があって、日本には日本なりの方法があるとおもう。それでもお互いに手話言語がそれなりの特徴を帯びて、聾コミュニティの中に存在していることは確かであるし、それが、やはり自分には教師がろう児の手話言語力をある程度掴んでおく、または分析していけるようにしていく環境を整えていくことは大切ではないかとおもう。

LIN 521 Introduction to Cognitive Linguistic

認知言語学における様々なアプローチ法、セオリー、具体的には主体の言語使用や経験によって学んでいくという言語習得の仮定、またゲシュタルト的な経験のパターンと言語現象の関係、また記号的文法観などがある。前にも説明したが LIN 521 Cognitive Linguistic では基本的に Langacker の本を中心に進めており、その他の教本といえば Gallaudet University 大学の前言語学学科の教授主任であった Scott Liddle 氏の本、また Tau 氏の本である。主な内容は認知言語学における手話の研究であり、認知言語学分野では有名な Langacker の本を代表に、ゲシュタルト的なアプローチ、それに関した様々なセオリーについて学んでいる。例えば、ケンブリッジ大学の Taub の本によればアナログビルディングセオリーというのがあり、そのセオリーにもとづいていかに手話が認知言語として体系づけられたものになるのかといった証明方法、また分析ができるようにと言われている。またその他にもビリヤードモデルというのも学び、このセオリーを使って、手話言語に当てはめて分析するというプロジェクトにも参加した。

このプロジェクトには、今までに学んだトピック、またはセオリーに基づいて、リサーチを行わなければならず、自分が選んだテーマは Non-manual Sign における CG の可能性である。このクラスの他に履修している LIN 585 Linguistic of Non-Manual Sign Language からインスピレーションを得て、様々な可能性から、このテーマを考えた上で、リサーチを行った。

認知言語学を学び始めてもう二年になるが、応用認知言語学分野にも興味を持ち始め、独学ではあるがそれに関するトピックをチェックするようにしている。いつか認知言語学に関したろう児への英語教育というテーマでリサーチが出来たらと思う。

LIN 703 Proseminar 1

言語学に関する総合知識を深めるためのクラスである。このクラスは言語学分野においてリサーチをするための情報収集方法や、またリサーチを行う際に必要不可欠な情報リテラシー力をあげるためのクラスであり、言語学の生徒は毎年、このクラスをとることが義務となっている。

LIN 585 Linguistics of Non-Manual Sign Language

アメリカ手話における Non-Manual Sign Lanuage の分析方法、またそのセ

オリーを学ぶクラスである。基本的な Non-Manual Signals を学ぶことによって、身体の動きや、顔の情報を言語学の視点から分析する力を付けるというのが最終的な目的となっている。

Non-manual sign とは簡単に言えば顔の表情にとどまらず、口の動き、身体の傾きなど、手の動き以外に身体から表現される弁別的素性をもった音韻単位のことである。米国では略して、NMS とされるが、単語、句単位、また文単位で修飾する性質をもった Adjective &adverbial NMS から、手の動きに合わせて音韻化される性質をもった Echo Phonology というものまである。またこの他にも Body Leans など Sentence レベルで Marker 的役割を果たす性質を持ったものについても学んだ。手話言語学の勉強をしている時につくづくおもうのは、NMS は手話言語学においても、話し言語にない独特の分野であるということである。というのは、単なる発話（音）に基づいた、音そのものに焦点を当てた音声学の考え方からにしてみれば、NMS を一つの弁別的素性をもった音韻単位として見る考え方は理解しがたいかもしれない。とはいっても、米国ではヨーロッパ側の NMS に関する研究と比べると、数少ないが、それでも手話言語学に関する研究という面では幅が広いとおもう。

その他にもこのクラスを教えている Mather 教授は教室内における教師の Eye gaze の使い方に関する研究で有名な人であり、彼女が発達させた Eye gaze の評価表はギャロデット大学内でも教授の評価方法の一つとして使われている。

このクラスから得たことといえば、NMS を言語学の視点から分析する力がついたこと、また手話で話された内容の裏にある寓意的な意味を、きちんと prosodic レベルで分析する力がついたことである。この知識は日本手話にも応用が利くし、また日本手話ならではの意味、また隠喩的な意味を韻律単位で分析することが出来るだろう。ただ実際に教育現場でこの分野が活かされる場所はどこだろうかと考えた時に思い浮かぶのは、国語や英語のようなクラス内での教科として教えられる文単位レベルのものではなく、実際に日常生活内でのコミュニケーション内で児童たちが自然に習得できる環境である。となれば、この内容はろう者、ろう児と一緒に仕事をする教師、大人たちが手話に対する基礎知識として知っておくべき内容ではないかとおもう。

Tutorial Instructional Program の経験から

前セメスターから働いていた Tutorial Instructional Program だが、今回も働

かせて頂けることになり、今学期はマンツーの Tutor では３人の生徒を受け持った。今までは国際学生の Tutor だけだったのが、今回はアメリカの学生、また Walk in の生徒達の tutor をも受け持つことになり、前回とはまた異なった経験ができた。例えば、生徒ひとりひとりにしても、必要なニーズが異なっており、それに合わせてこっちが用意しなければならない教材や、準備内容というのも異なってくるので、本当に生徒一人一人のニーズ、また状況を把握しておくように気を配った。次の学期に English Linguistic Institute で実習することが決まり、この経験が次に繋げられたらとおもう。

TISLR について

TISLR とは Theoretical Issues in Sign Language Research 10 の略語であり、手話言語学学会によって 4 年に一回、開催される世界的な手話言語学会議のことである。今回は９月３０日から１０月 2 日までの三日間であり、開催場所はインディアナであった。場所が米国内だけに、ギャロデットの言語学部からは私を含めて、ほとんどの学生、教授方が参加した。

まず参加して驚いたことは、ヨーロッパの non-manual signal に関する研究の多さである。特に形態素、prosodi に関する研究が多く、mouthing と mouth gesture の区別には触れていなかったものの、研究資料の数では米国を凌ぐ。その他には米国の language acquisition に関する研究が目をひいた。近年ではコーダに関する研究が増え、この会議内でもこのエリアのプレゼンの４つはコーダの言語習得過程に関する研究であった。

最後に気になったのが認知科学分野と言語学者の共同作業による研究の多さである。この分野に関する研究は会議内でも 6 人のスピーカーが来られ、最新の研究データを発表しておられた。

この会議に参加することで、米国内に限らず、ヨーロッパ内の言語学者とお話しをする機会に恵まれたことは大変貴重だとおもう。またヨーロッパ国内の言語学の研究の状況、またその内容などを聞くことができて、勉強になった。